

神戸。

この街は、瀬戸内海を臨む緩やかな気候に包まれ、緑豊かな六甲山系を背負った陽当りの良い南向きの斜面が東西に細長く広がり、そこを流れる幾筋かの小さな川が穏やかに刻んだ谷が、上質の演奏家による品の良いアドリブのように、風景に華やかさと楽しさを添えている。

古くは源平の時代、義経の逆落とし伝説や敦盛の悲劇を生んだのをはじめ、東山魁夷の色彩、

野坂昭如の螢の墓の哀しさ、白州次郎の国際感覚、淀川長治の眉毛、永島昭浩の右足、藤原紀香の美脚など、枚挙にいとまないほどの誇るべきものを生み出した。

ここまでの神戸賛辞をお読み下さった読者の少なからぬ方は、うんざりとした溜息とともにお察しのことだろうが、僕は神戸に生まれ、神戸に育った。「神戸人は神戸を溺愛し、それをやた

らと口に出すので、嫌われる」と世間でよく言われるらしい。なるほど、仰る通りだろう。それでも、何と言われようと、僕は、神戸が好きだ。断言できるが、世界中にある無数の街の中で、神戸は最高にかけがえのない街だ。もちろん、「僕にとって」ということだ。

“神戸”と題した本稿で僕が語ることができるのは、あくまで、僕にとっての、主観的なあるいは個人的な神戸の話だけだ。✓

E . S . S . A . Y

## 神戸

京都大学大学院 消化器内科 青井 貴之



客観的で一般性を有する神戸論を語る資格も資質も僕には全くない。努力次第では、客観的視点を持つ取り組みを諦めてしまうことのない誠実な読者にはなれるかもしれないが。

長い前置きの最後に、僕は神戸を離れて十年目の春を迎えたことを加える必要があるだろう。一般的に言って、過去の記憶、中でも遠きにありて想う故郷は、美化あるいは“個人的な脚色”がなされる傾向（あるいは“危

険”）があるものだからだ。

さて、“個人的な神戸自慢”をあと一つだけ。休日の朝食に、贅沢で豊かな満足を求めるならば、デリカテッセンのソーセージとフロインドリーブのパンというコンビに勝るものはないと思っている。デパートでも手に入るが、折角なら本店に足を運ばれることをお勧めする。どちらも、あれだけの美味をそろえる店だが、つつましく、坂道の

途中に、在る。神戸の素敵な店の多くは坂道にあるのだ。



神戸は坂の街だ。

王子動物園から十分ほど坂道を上がった古い家の二階で、成人の日とその振替休日の連休に遊び疲れて寝ていた大学3年生は、彼にとっては珍しいことに、未明に目を覚ました。呑みすぎ

たビールのせいで尿意を催したわけでもなく、布団を蹴り跳ばして寒さに震えていたわけでもないが、妙にすっきりと覚醒したことに首をかしげながら、枕元の時計を手を取った。まだ六時にもなっていない。まあ、ちょうどいい。今日は病理学のスケッチの提出日だが、完成していないので、早めに起きて描く予定だったから、そろそろ起きてもいいか。それにしても、早すぎるか……。

ぼんやりと天井に目をむけてそんなことを考えていると、真冬の朝の沈黙の中に、地鳴りが聞こえた。片側一車線ずつの道路が彼の家の前で緩やかな「く」の字をなしており、普段の昼間でも、大型車が速度を落とさきらずに通ると、彼の家の古い木枠の窓ガラスを震わせた。こんな時間に何のトラックか？ と、ベッドの横の南向きの窓から、ひどい近視の眼で外を覗いたとき、陸と空の境界も判らぬ闇の中の、しかし、家の前の道路よりははるかに遠いところに、閃光を見た。

その光が何者であるかという疑問を持つ間もなく、太く低く強い音とともに、彼はベッドから跳ね上げられた。

それから上下に強く振り回された。跳ね上げられては落ちてくる、というのではない。持ち上げられたと思ったら下から引

っ張り下ろされる、という表現が“主観的”には正確である。「攪拌」。カクテルを作るシェイカーに入れられた氷はこんな気分なのだろう。と、こんな事をその時に思い浮かべる余裕など勿論なかった。

その攪拌の中、彼が思ったことは「つい近くに飛行機が落ちたんだ」ということだった。それは、幼い頃、彼の姉が彼に「ソ連とアメリカが戦争始めて、ミサイル撃ったら、ちょうど日本の上でぶつかって落ちてくるねんでえ」と言って怖がらせたことが、彼の中で記憶の島として残り、そんなことは起こり得ないと判る歳になっても、ソ連という国すらなくなった後も、“巨大な落下物への不安”として続き、故障した飛行機が自分の上に落ちてきたら怖いなあという心配が、時々（ごく時々だが）彼の意識に浮かぶことがあったのだ。

攪拌がどれぐらいの時間続いたのかは分からないが、とにかくそれが終わり、引き続き始まった水平方向の揺れが落ち着いてから、窓の外を見たが、飛行機の残骸はなさそうだった。

そうか、地震なのだ、これは、と彼は漸く思い至った。なにせ、ずっと神戸で暮らしてきた彼には、地震を体感じた記憶がなかった。ニュースで震度1とか2とかの地震があったと知り、

小学校に行くと、「昨日、俺、揺れたなと思ってしばらくしたらニュース速報が出てん」と得意気に語る友達の話を聞いて、自分は鈍感なのか、とにかく、なんだか少し負けたような気分になったものだ。子供というのは妙なことで得意になったり、悔しがったりする。

小学校の頃。「地震が来たら、机の下に隠れなさい。」先生の指示に従って、整然と並んだ机の下に、行儀よく一斉にもぐりこむ訓練をした。しかし、さっきの攪拌の中で、ベッドの隣にある机の下にもぐりこむなんて、できる奴はおらんわな。そもそも机が転がっている。何事もケースパーケース。全てのケースの訓練はできないのは仕方ないが、習った通りにならない場合、というのもあることを、小学生にも教えておくのは結構大事なんじゃないか。そうすればそれから先を自分で考える奴が、クラスに何人かは出てくるかもしれない。

さて。とにかく眼鏡がないと、何も行動できない。普段の自分の家ですら、眼鏡がないとトイレにも安全にたどりつけない。踏み潰さないように慎重に手探りをしていくと、ベッドからやや離れたところでそれは見つかった。幸い割れてもいない。倒

れた本箱をどけて、ラグビーをしていた彼が力いっぱい引っ張ると部屋のドアは開いた。

家族の無事も確認でき、余震の続く中、古い家から出ることができた。寒い。車に入った。車は移動のための機械だが、硬くない椅子に座って自家発電で暖房の中ラジオを開ける機械でもあるのだ。

「神戸地方で地震がありました。須磨区では、コンビニエンスストアの棚が倒れるなどして、7人が怪我をした模様。」

彼の家の真向かいには、山麓の住宅地と三宮を結ぶ路線のバス停がある。きちっとしたスーツに堅実なデザインのネクタイを締めた男性が、坂を下りてきてバス停に立った。腕時計に何度も目をやり、少し首をかしげては、道路に身を乗り出してバスがやってくるはずの東の暗闇を幾度か覗き込んだ。

「病理のスケッチの締め切り、延期になんやろうなあ。」

やがて、辺りに都市ガスの臭いが漂いだした。家々から人々が表に出てきた。寝巻きにコートを羽織った人もいたが着替えていた人も多い。スーツ姿の男性は、バスの到着をあきらめ、いつもならヘッドライトが現れるはずの東の闇を見ながら、自宅の方へと坂を上っていった。

1千万ドルの夜景とよばれた無数の灯りの群れも消えていた

早朝の闇の街の姿を、やがて冬の朝日が照らし始めた。幾筋かの煙と、炎が、坂の下の方に見えだしたのはもうしばらく後だ。



ここから先の光景は、“僕にとっての主観的な神戸”と読者諸兄がご存知の“客観的な神戸での出来事”が、比較的一致しているものと思われる。僕よりはるかに高い筆力をもった記者や文筆家による既存の文章に僕が加えることは何も無い。



一月ほど経った頃だっただろうか。大阪の大学に通っていた親友が、「ゆっくり風呂にでも入りにおいでや。」と下宿によんでくれた。小さなユニットバスだったが、とても気持ちよかった。夜は当然、呑んだ。その頃の多くの人がそうであったように地震に関連する体験を、お互いに話し続けた。語るべきエピソードは尽きることはなかったのだ。

「何年たっても、何十年たっても、この先どっかで神戸の人と会ったら、必ず震災の話になるんやろなあ」と親友は言った。その通りだと思った。



十二年が経ち、当時の大学3年生は医師となって十年目の春を迎えた。その親友は地震の翌年の春から神戸を離れ、ここ2年は海外勤務だが、必ず年に何度か会っては長い酒を呑んでいる。二十一歳の予言なんて当てるものではない。何十年先どころか、この十二年で震災にまつわる話を彼としたことは、ほとんどない。彼とだけではない。その間多くの神戸人と新たに出会ったが、震災の話はしない。美味しいパン屋や洋菓子屋や肉屋の話にはなる。

客観化、一般化が既になされていることを語るのはたやすいが、個別性の高いことを語り合うことは難しい。また、本来は主観的で個人的問題であるのに、安易に一般化して語りかけるのは危険だ。真実を見失う危険と、悲しみと真摯に向き合いながら何とか現実との折り合いをつけてようやく保たれている弱い立場の心を傷付けてしまう危険だ。



神戸は坂の街だ。

坂道を何分か上れば地盤が強く被害が少ない地域になり、十分も下れば、大きな被害がある地域になった。僕だってあの小学校の同級生の家にいれば、ニュース速報の前に地震を感じて

いたのだろう。震災後のボランティアの手厚さと治安の良さが世界から賞賛を受けたが、坂道を軸に、被害の大きかった地域と、被災後も比較的余裕のあった地域が近接していたという都市の構造の影響は無視できない。しかし、坂道だけでなく、他にも無数の軸があって、そのことが神戸人に震災の記憶を語らせない、ともいえるのではないか。

神戸は震災を体験した。この世の全ての人には、各々の“主

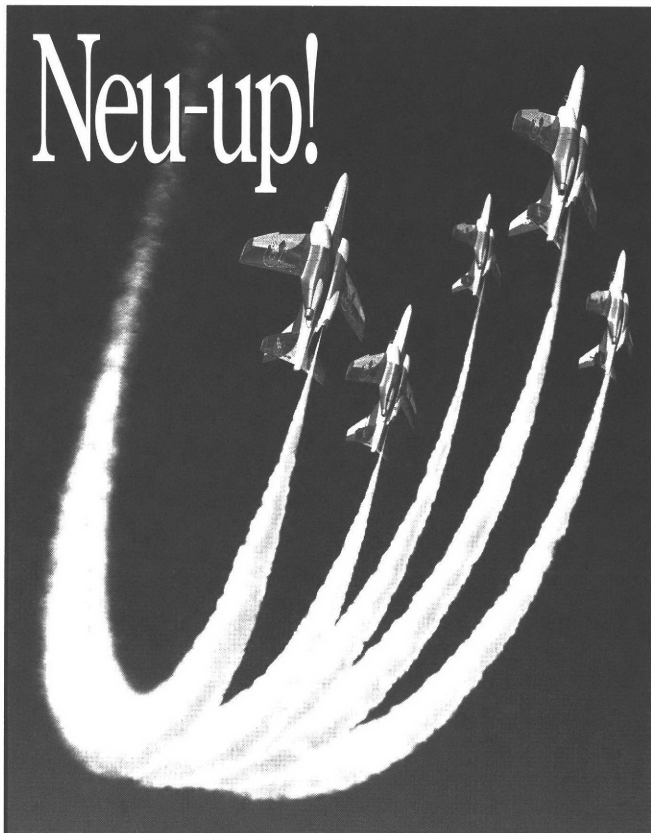
観的な故郷の街”があり、“個人的被災体験”がある。病や老いや死だ。それに関わる仕事を僕はさせていただいている。

「地震がきたらとにかく机の下に潜り込みなさい」そんな風になってしまっていないか時々自問する。

そして深夜の病棟や研究室でふと、数千の命が損なわれつつあった夜明け前の街の闇の中で、スーツを着てバス停で腕時計を気にしていた男性の姿を思い出すのだ。

## 近況

現在僕は、京都大学医学研究科消化器内科の大学院生です。京都大学の再生医科学研究所の山中伸弥研究室で、再生医療の実現を目指して多能性幹細胞の研究をしています。



遺伝子組換えヒトG-CSF誘導体制剤  
指定医薬品/処方せん医薬品\* <薬価基準収載>

**ノイアップ®** 注 25 100  
50 250

Neu-up® for Injection 注射用ナルトラスチム(遺伝子組換え)  
25μg/V, 50μg/V, 100μg/V, 250μg/V

\*注意-医師等の処方せんにより使用すること

■「効能・効果」、「用法・用量」、「使用上の注意事項」は製品添付文書をご参照ください。



製造販売元 [資料請求先]  
協和発酵工業株式会社  
東京都千代田区大手町1-6-1  
<http://iyaku.kyowa.co.jp/>

06.06.